

はだか武兵



むかしむかし、中山道すじの「うぬま」というところに、はだか武兵という男がおった。わかいころはたいへんな酒ずきでな。あんまり大酒飲んで、らっぽうするもんで、近所の人びとにきらわれて、とうとう家におれんようになった。それ、東海道の雲助になってな。何年かたってから、中山道の中津川の宿場に来て、茶屋坂というところに、小屋を建てて住むようになったんや。

武兵は、生まれつきの力もちでな。そのうえ、どんな寒いときでも、はだかでおったもんやで、木曾街道の雲助の仲間から「はだかの兄き」と言われておったそうな。

あるとき、武兵は、木曾へお客を運んで行って、帰りに日がくれてしまったもんで、木曾街道の須原という宿場の、神社の拝殿にとまったんや。そのとき

に、白いひげのじいさまも拝殿にとまっとつてな、たいくつなもんで、ふたりでいろいろ話をしとつたんや。そしたら、しまいにじいさまが、

「おれは疫病神だが、ひとつおまえと兄弟分になろうじやないか。」
と、いったんや。

「兄弟分になってどうするんじや。」

と、武兵が言うと、

「おれがなあ、どんな家におつても、おまえが来たら、きつとにげていくことにするわ。」

と、言ったもんでな。武兵は、これはおもしろいと思って、兄弟分のやくそくをしたそうな。

あくる日、ふたりがつれだつて中津川へ歩いておつて、ふと気がついてみると、白いひげのじいさまは、どこへ行ったんか、おらんようになってしまった。武兵は、

「ふしぎなこつた。ふしぎなこつた。」
と、みちみち、ひとりごとを言いながら帰つて来たそうな。

そんなことがあつてから、しばらくたつて、なかまの雲助が、ひどい熱病にかかつたんや。武兵が、白いひげのじいさまのことを思い出して、その雲助のところへ行くとな、つぎの朝、熱はすっかり下がってしまったんや。こんなことが二へんも三べんもあつたもんだから、はだかの武兵は、熱病をなおすといふひょうばんがたつたんや。

それから何年かたつたある冬の日に、中山道の大久手の宿に、大さわぎが起つた。それは、あるおとのさまのおひめさまが、江戸へ行くとちゅう、病氣にかゝりなざつてな。それがまたひどい熱病で、近所の医者が、みんな集められたが、どの医者も、

「これは、わしの手にはおえん。」

と言つてな、さじをなげたんや。それで、おつぎの家老は、こまつてしまつて、どうかしておひめさまの病氣をなおしたいもんだと、氏神さまにお百度をふんでおがんだが、それでもおひめさまの病氣はなおらん。だんだん重うなるばかりや。

六日目の朝になつて、宿場の人夫頭が家老のところへ来て、

「おしかりを受けるかも知れませんが、中津川の宿に、えき病をなおす、はだか武兵という雲助がおります。身分はいやしいものですが、この者をおめしになつてはどうでしょうか。」

と、おそろおそろもうしあげたんや。家老は、おひめさまの病氣は重くなるばかりやし、医者は見放してしまふし、こまりきつておつたもんで、身分のことなど言つておれん。

「よし、それをよべ。」

と言つたんや。それで、すぐさま家来と人夫頭が、中津川の宿の、はだか武兵のところへ飛んで行つたんや。

その日はたいへん寒い日だな。ひとり者の武兵は、うす暗い小屋の中で、夕めしを食つとつたんや。人夫頭が、

「はだか武兵とは、おまえか。大久手の宿でおひめさまが、たいへんな熱病でおくるしみだ。すぐ来てくれ。」

と、たのんだが、武兵はだまつて夕めしを食つとつて、いっこうに出かけようとせんや。いらいらしてきた家来がな、刀をぬいて、



「おい、武兵、おれたちのたのみがきけんのか。」
と、おどかしてもな、武兵は、知らん顔しておったんや。しかたがないもんでな、人夫頭が、近くに住んでおるおとくばあさんのところへたのみにいったらな、おとくばあさんが小さな声で、

「むりやりつれて行きんさい。」
と言ったんや。それで、武兵をむりやりにかごへおしこんで、大急ぎで帰ったんや。

大久手の宿に着いた武兵を見て、家老や家来たちが、あつとおどろいた。雪ふりの寒い日というのに、武兵は、ふんどしひとつのまっばだかだな。黒光りするはだは、きん肉がもりもりともりあがつとつて、とてもたくましく見えたんや。家老は、はだかの武兵にびっくりしたが、おひめさまの病気が心配だから、さつそく、おへやへ案内したんや。

武兵が、おひめさまのへやへはいつてから、しばらくたつと、一番どりがないた。それでもおひめさまのへやからは、なんにも聞こえんのや。おひめさまのへやへ雲助の武兵ひとりを入れたんだから、家老は心配で心配でたまらん。

どうなることかとじつと耳をすましておったんや。すると、お寺の鐘が、ゴーン、ゴーンとなつて、夜明けをつけ出した。その時にな、へやの中からかすかに、ウーンというおひめさまのうめき声がきこえてきたんや。（これは……）と思つてな、家老がからかみをすつとあけてみると、おひめさまの病気はすつかりなおつたんや。

家老は、大よろこびでな、

「武兵、おてがらじゃ。ほうびは、望みどおりにあたえるぞ。何でも言え。」

と言つたけどな、武兵は、

「わしは、ごらんのとおりのはだか武兵です。何もいません。」

と言つてな、何も もらわなんだそうな。

そのあくる日は、十二月一日。この日は、めずらしくよく晴れた春のような日やつた。おひめさまの行列は、十日ぶりで大久手の宿を出発したんや。それからのはなあ、

「はだか武兵の兄さが、おひめさまの病気をひとばんでなおした。」
と、近所かいわいの大ひょうばんになつたんや。

いまでもな、中津川の旭が丘公園に、このはだか武兵がまつつてある。石碑の前に、舟形の石が置いてあつてな、この石をたたくと、チンチンと金のような音がするので、チンチン石と言つとる。悪い病がはやるときにゃ、自分の年の数だけ、チンチンと石をたたくと、病気にかからんと言つて、おまいりする人があるんじゃ。

文・大島 虎雄
絵・高橋 錦子

川原のお紅



むかしむかし、中津川の駒場に水神様をまつた、小さな祠があった。中津川のほとりでな、そこには、一本の大きな杉の木が、そびえるように立っていたんや。古い杉の木なのでな、根元に大きなほら穴があつて、「お紅さま」と呼ばれる古ぎつねが、住んでいたそうなの。

お紅さまは、白粉と紅をつけることが大好きでな、ひまさえあれば白粉をつけ紅をひいて、水鏡を見ては楽しんでたそうなの。村の人たちは、「お紅さま、お紅さま、」と呼んで、神の使いをする古ぎつねだと、思いこんでいた。

ある寒い、冬が来たかと思われるような夜だった。駒場の太平さんという人が、町からの帰り道に、水神様のそばの細い道を、急ぎ足で歩いてゆくと、向うから美しいお姫様のような娘が、足を痛そうにひきずりながら歩いて来た。太平さんのそばまで来ると、



「道に迷って困っています。どうか今夜一晩の宿をお願いしとうございます。」と、悲しそうな顔をして、太平さんに一夜の宿を頼んだそう。生れつき正直で、親切者の太平さんは、すっかり同情してしまつて、家へつれて帰り、とめてやることにしたそう。

太平さんが先にたつて、しばらく歩いてみると、

「あつ、ぞうりの緒が切れました。少しお待ちください。」

というので、太平さんが立ちどまつて、ふと振り返つて見ると、どうでしょう。そこには、恐ろしい顔つきの古ぎつねがいたんや。目はらんと光り、口は耳もとまでさけていて、今にも飛びつきそうな姿勢だつた。

「さあ、お前さんの命は、わたしがもらったよ。」

というなり、太平さんを抱えるようにして、どこへともなく暗い闇の中を走つていったそう。不意のことだつたし、恐ろしさもあつて、太平さんは声を出すこともできなかつたそう。

翌日になつて、太平さんの帰らないのに気のついた近所の人たちが、あちらこちら心あたりを探して歩いたがわからない。そのうち誰からもなく、

「太平さんは、水神様のお紅さまに、かどわかされたらしい。」
と言い出した。

「それに違いない。神様のお使いだと思つていたのになあ。」

「そうだ、そうだ、お紅さまあまりひどすぎるぞ。」

「ひつ捕えて、こらしめてやらなくちゃ。」

などと言ひ合つて、村人たちは、手に手に鍬や鎌をもつて、お紅さまを捕えようと、大杉の下へ集つてきたそう。

すると、高い大杉の上から、お紅さまが、

「みんなの衆、どうか許しておくれ。もう決していたづらはしないから、太平さんも返すし、この駒場からも出てゆきます。それに、この大杉にわたしの魂を入れて、長く駒場を守つてあげますから。」

と言う。ひつ捕えてひどい目にあわせてやろうと思つて、集つた村人たちも、かわいそうに思つたんやろうな、捕らえることを止めて、馬一頭をめぐんでやったそう。お紅さまは、大よろこびで馬にまたがり、駒場から出ていったそう。

長い間住んでいた大杉を、ふり返りふり返りゆくお紅さまは、白粉と紅をつけて、お嫁さんのように美しかったということだ。

今は、工場などができて、すっかり変わってしまったが、お紅さまの杉の大木は、最近まで、中津川のほとりの牧場の裏手にあって、何百年ものむかしを知っているかのように、高くそびえていたんや。

文・大島 虎雄

絵・高橋 錦子

白い犬



むかしむかしの話。景行天皇のみ代のことだから、今から千九百年も前のことだ。ヤマトタケルノミコトと言う、それはそれはかしこい、力の強いミコトがおられた。

そのころ、東国にあつて、わがままをしていたエゾを征伐して帰るとき、ミコトは、キビノタケヒコを越の国につかわして、国のようすを調べさせ、ご自身は、信濃の国から神坂峠を越えて、尾張の国に出ようとなされた。

このあたりは、山は高く谷も深くて、なかなかの難路であつた。ことに、神坂峠から恵那山にかけては、高い山が重なりあつて、道らしい道もなく、ところどころにかけはしを渡したところもあつて、人は杖にすがりながらようやく歩くことができたが、馬などは、こわがって進むこともできないようななんぎな道であつた。



ミコトは、この難路をようやくのことで峠までたどりつかれたが、大変なお疲れようであった。そこで一休みして食事をおとりになった。恵那山の山の神は、このようすを知らんになって、一つミコトを試してやるうとお思いになった。そこで、白い鹿になってミコトの前にお立ちになった。ミコトは、昼もす暗いこの山の中で、急に白い鹿が目の前にあらわれたので、驚きになるともに、「これは怪しい。」と、お思いになって、ちょうど手に持っておられた一つの野ビルを、白い鹿めがけて投げつけられた。すると、その野ビルが鹿の目にあたり、鹿はその場に倒れてしまったそうだ。

それから、急に白い霧がたちこめてきて、ミコトの歩まれる道がわからなくなってしまった。ただでさえけわしくてなんぎな道であるのに、白い霧がたちこめたからたまらない。ミコトは、あちらこちら迷い歩かれて、大変なお苦しみようであった。困り果てておられると、どこからともなく、白い犬があらわれて霧の中を歩いてゆく。ミコトの前を歩いてゆく犬のようすを見ると、あたかもミコトをみちびいているかのようだった。ミコトが犬のあとをついて歩まれると、あれほどなんぎをしていた恐ろしい山を、無事に通りすぎて、美濃の

国に出ることができたそうだ。

一度は、白い鹿となってミコトを試された山の神も、ミコトのあまりの苦しみように、こんどは白い犬となってあらわれ、ミコトの道案内をされたのだった。ミコトはここで越の国から来たキビノタケヒコとおち合って、尾張の国に向われた。

今までも、この神坂峠を越えるとき、多くの旅人が山の神の気にふれて、なんぎをしたり、病にかかったり、あるいはそのためになくなったりすることが、たびたびであったそうだ。が、こんなことがあってから、旅人がこの峠を越えるとき、野ビルを飲んで、その汁を体にぬって通ると、神の気にあらず、無事に峠を越えることができたということだ。

文・大島 虎雄

絵・吉村 茂夫

火あぶりせんどさん



むかしむかし、中津川から阿木、岩村へゆくには、今の根の上高原の峠を越えていったものだ。

ある年のある日、せんどさんという馬方が、中津川の町で、日用雑貨や魚などを仕入れ、馬の背に積んで、この峠にさしかかると、道ばたに腰をおろして休んでいた、一人の美しい娘が呼びかけた。

娘は、

「日も暮れようとしているのに、足をいためてなんぎをしています。申しわけないことですが、馬の背にのせていってもらえないでしょうか。」

と頼むのである。せんどさんは、

「それはお困りじゃ。」

と、親切にのせてやった。

娘をのせてしばらくゆくと、道は急な坂になった。

(馬の背の娘さんは、大丈夫かな。)

と思つて、せんどさんがふりかえつてみると、どうだろう。驚いたことに、娘の姿はおるか、仕入れてきた魚や油揚げなど、みんななくなっているではないか。「さては、娘はきつねだったのか、またやられたか。」

と、くやしがつた。

こんなことが、二回も三回もあつたので、さすがの親切者のせんどさんも、くやしいやら腹だたしいやらで、今度こそひつ捕えて、こらしめてやろうと思つた。

それから幾日かたつたある日、いつものようにせんどさんが、中津川で品物を仕入れて、この峠にさしかかつた。すると、美しい娘が道ばたに休んでいる。(出たぞ、出たぞ、きつねの化けた娘に違いない。今度こそは、だまされないぞ。)

と、せんどさんが思いながらゆくと、例のように娘は、馬の背にのせてくれという。せんどさんは心よく承知して、娘を馬の背にのせながら、



「今日は、馬のきげんがわるい。坂道で暴れるかも知れない。娘さんが落ちるといけないからの。」

と言つて、用意してきた荒縄で、娘をぐるぐる巻きにして馬にしばりつけた。体をぐるぐる巻きにされ、馬にしっかりとしばりつけられたからたまらない。馬の歩きたびにぎゅっぎゅっとしめつけられて、息もできないほど苦しい。娘はついに正体をあらわし、きつねの姿になってしまった。

家に帰ったせんどさんは、きつねを馬屋の柱にしばりつけ、後でゆっくり火あぶりにしてくれんと、酒をのみのみながめていた。せんどの女房は、せんどさん以上にやさしい人だったから、

「かわいそうだから、逃してやつたら。」

と話しかけたが、いっこうにききいれそうにない。そのうちせんどさんは、疲れと酔いで眠ってしまった。女房は、

（主人がねている今のうちに。）

ということ、馬屋の柱にしばりつけられて、しょんぼりしているきつねの縄をといて、逃してやった。きつねは喜んで、コンコン鳴きながら山の方へ走っ

ていった。

それからというものは、きつねは物をとらなくなったばかりか、せんどさんがいつものように峠にさしかかると、美しい娘になって、

「火あぶりせんどさん今、お帰りか。」

といつては、出迎えるようになったということだ。

文・原 哲子

絵・加藤 公雄

取手の藤吉

むかしむかし、駒場の石屋坂の近くに、取手の藤吉というきつねがおったそ
うだ。夜になると、石屋坂に出てきて、通る人をたぶらかしては面白がって
た。

このあたりは、人家もなく竹藪がつづいて、昼間でもうす暗いようなところ
だった。ある日、この石屋坂のはずれに住んでいたあんまさんが、中津の町で
仕事を終って帰ってきた。もう日ぐれどきで、石屋坂は暗くなっていた。が、
いつも通いなれた道であるし、目の見えないあんまさんにとっては、夜の道と
言っても特別気になるものでもない。いつものようにぼつぼつと歩いて、坂の
中ほどまでくると、突然、娘さんらしい人の声が出た。

(はて、この時間にこんなところで誰だろう。)
と、思っ立ちどまると、声の主が近くによつてきて、

「実は、私の主人が肩がこつて困るのでお前さんを呼んでくるように、と言っ
ています。おそくて申しわけありませんが、私の家まできてくれませんか。」
と言う。あんまさんは、

(こんなところで、こんな時に、ど
のどなただろう。)

と思つたが、

(まあ、少しの時間ならいいだろう。)
と、声の主に手を引かれついでに、
一方こちら、あんまさんの家では、
いつもより帰りがおそいあんまさん
に、何かあつたのではないかと気にし
ながら待つていた。が、あまりにおそ
いので心配になり迎えに出てきた。石
屋坂までくると、これはどうしたこと
だ。あんまさんは、竹藪の中にある馬



頭観音の肩を一生けんめいにもんでいるのだ。

家の人は驚いて、

「おいおい、何をしているんだ。お前さんのもんでいるのは馬頭観音様だぞ。」

と呼びかけると、ようやく我にかえったあんまさんは、

「どうりで、いくらもんでもやわらかくならんと思った。」

と言ったそうさだ。

これを聞いた村の人たちは、
「いくらなんでも、目の見えないあんまさんを、かどわかすとは、取手の藤吉もひどいきつねだ。」

と言いあつて用心したそうさだ。

文・原 哲子

絵・大橋 寿美代

じつり どうし

実利導師



むかしむかし、実利導師という山伏が、いたそうさだ。修業のため各地をまわっていたが、あるとき、川船にのろうとしたら、あまりにみすばらしい姿をしていたので、船頭にことわられた。船にのせてもらえなくては川を渡ることができない。困った実利導師は、

「それでは船べりにつかまらせてくれないか。」

と頼んだ。船頭は、

（船べりにつかまってどうするのか。）

と思つたが、承知して船を出した。

ところが不思議なことに、山伏は水の上をすたすたと歩いているではないか。よく見ると下駄だけが水の中にはいつて、山伏は沈むことなく、船べりに手をかけている。あまりのことにおどろいた船頭は、



(これはただ者ではない。
と、思つてあわてて船にのせたということだ。

この山伏が、諸国をまわっているうちに、ある寒い冬の夕ぐれどき、阿木の
広岡の友吉という男のところに立ちよつたそうだ。ひとりのぼろをまとつた山
伏が、軒下に立っていて、

「旅の者だが、日が暮れてしまった。今晚とめてほしい。」
と一晩の宿をたのんだ。

友吉は、貧しくて不自由なくらしをしていたので、客などをとめるよゆうな
どなかつた。が、日ごろから人情にあつい、親切者であつた友吉は、みすぼら
しい姿なので安心しながら、この冬の寒空だし、困っているようすを見ると、
ことわることもできずに、承知して家の中へ引き入れようとした。

ところが、山伏は戸口に立つたまま、

「とめてくれるのはありがたい。どうかいろりの灰をかえてくれ。」
という。友吉は何が何だか、わけもわからないが、いろりの灰をとりかえた。
すると山伏は、障害物がなくなつたとも言つうように家の中へはいつてきた。

友吉がよく考えてみると、あのいろりの灰は、前の日に猪の肉を焼いた灰だった。

あくる朝、山伏は一夜の宿のお礼を言いながら、

「友吉さんも不自由なくらしをしておられるようす。私は旅の者で何の持ち合せもないが、日ごろ修業した身だ。私の左手を差しあげよう。」

と言つて、一枚の紙を取り出し、さらさらと一筆。『実利導師』と書いて、その下に左の手形を押したそうさ。そして、

「何年かあと、あるところから、ある男がたずねてきたら、この手形をゆずつてほしい。」

と言ひ残して、去つていったそうさ。

友吉は、その後、山伏の教えをうけついで修業もし、一かどの指導者の地位を得たそうさ。

それから何年かたつて、山伏の言ひ残していった、あるところのある男という人が、友吉をたずねてきた。それが川上の大井九蔵という人であつたそうさ。大井九蔵は、手形をゆずりうけるとともに、友吉からも教えをうけて修業

し、それから、一生涯、困つた人を助けたり、迷っている人のよい相談相手になつたということである。

ところで、実利導師とは、後に御岳山を開いた覚明上人、その人であつたということだ。

文・原 哲子

絵・吉村 茂夫

へんび神様

むかし、むかし、川上の上の畑と言う所に大きな洞穴があつて、そこには大蛇がすんでいると言ふことだったが、誰も見た者はいなかつた。

川上の人たちは、月に一度の念仏講のときや権現様の祭など、人の集るときに「大蛇の口はかますの口くらいでかい。」とか「尻尾の先は炭俵くらいの太さだ」とか「恵那権現様の大杉より大蛇はどでかい。」と、大蛇を見たような話をしていた。それというのも、上の畑にある洞穴には大蛇がすみついていて、川上の人たちは信じており、どこの家でも餅をつくると必ず穴の前に餅を進ぜたものだ。その餅は、明くる朝にはすっかりなくなつていた。もし、蟻の運ぶくらいのかけらでも残つていると「何か大蛇にあつたのかな。」「何か悪いことが起るのでは。」と、川上の人たちは心配し、見たことのない大蛇を神様の使いだと信じていた。

ある年の梅雨に入つた日のことだ。天の底がぬけたかと思うほど、ザンザと雨が降りだした。この降りようはただごとではない。たつた一日で川上川の水は、川岸の草も木もへし曲げ、どでかい石を「ガチン、ガチン」と川下へ押流し、正が根や奥の平のように、川からずつとはなれた高い所まで、泥臭いにおいをぶんぶんさせ、渦巻きながらごうごうと流れた。田んぼの水口に砂が流れこみ、植えたばかりの苗は水に浮き、畦からは下の田んぼへ滝のように水が落ちた。「こりあ、まだ降るに。どうしよう。」と、人々は心配をしたが、暗い空はいつこうに明るくならず、余計に暗くなつてくるばかりだった。雨が降りだしてから三日目に、川上の人たちは恵那権現や嵩の越の水神様へお日乞いのお参りに行つた。もちろん上の畑の洞穴の大蛇にもお祈りをした。

四日目になると「お日乞いの終わつた後に、皆んなで酒をいっばいやるのが楽しみよ。」と、冗談を言つていた人たちも、真剣な顔になつて「お百度参りでだめやで、千度参りじゃ。」「いや、万度参りにしまいか。」とか「まだ、まんだ信心が足りんわい。」と、あわてだし、秋葉山へ登り「まいるか、まいるかお日乞いじゃ、天がぬけたか雨よやめ。やぶれがさじゃぞ、ずぶぬれ



じゃ。おたのみ申すぞ、へんび様。」と、はやしながら、天にとどけとばかり鉦や太鼓をたたいた。恵那権現や水神様には前にもまして身を入れてお祈りし、大蛇の洞穴にはひとかかえもある大きな餅を進ぜたりした。

二日目から小降りになったが五日目も雨。川ばたの田んぼは水に洗われ始め、川ぐるの家は荒れくるった水のしぶきがかかり、地面は吸いきれなくなつた水を噴水のように吹き出した。ただならぬ雨降りに川上の人た

ちの顔つきがかわつてきた。

六日目の夕方、あれほど降っていた雨がぴたりと止み、雨だれが庭の柿の木からポタリポタリと落ち、もやもや動く雲の切れ目から夕日さえ射してきた。なが雨に降りこめられて家の中に閉じこめられていた人たちは、外へ飛び出し空を仰いで「ウーン」と背を伸ばし、顔を見合わせにつこり笑つたりした。

そのとき「グオーン」と、いう音と共に地面がゆらゆらとゆれ始めた。「オッ、オッ」と、おどろいている人たちの耳に「ドドドドオー」と、谷中にひびく、ものすごい音が聞え、目の前の山がゆらゆらと動き出した。皆んなの目に映つたのは、もこもこと木を押し倒し、水けむりをふきだし、田んぼをけずり、黒い牛が何万頭も一度に走り出したように迫ってくる蛇抜けだった。

「ヤアー、嵩の越山がぬけたあ。」「蛇抜けじゃ。」「子供をつれてにげる。」川上の人たちは大声で呼び合つて、蛇抜けに追われて下へ下へと逃げた。腰ががくがく動けなくなって田んぼの畦にへたりこむ人や、ぼたの桑の木にすがりつく人もあつた。

「恵那大権現様、助けて下され。」「大蛇様」「助けておくれ。」「南無観

音、御如来、なむかんのん、おによらい。「もう、神や仏におすがりするより仕方がない。逃げても逃げても山はくずれてくる。誰もがあきらめ、走るのをあきらめ、その場にすわりこんだ。その時、突然「ピカッ」と稲妻が光ると同時に「ドシャー」と、天地が裂けるようなどえらい音がした。みんなはこの世の終わりかと思ひ呆然としていると、どうしたとか、今まで川上の人たちを追いかけるように押し寄せていた蛇抜けの音がピタリと止み、ゴウゴウと流れる川上川の水の音だけが、まわりの山にこだましていた。「どうしたんや。」

「どうしたんや。」蛇抜けの音が止んだことに気が付いた人々は、おそろおそろ顔を上げて周囲を見まわすと、今までなかった三つの小山がぼっかりとできているではないか。そして、できたばかりの小山が「ガッ、ガッ」と動き出したと思うと、その動きもびたりと止まってしまった。それは生命のあるものが静かに終わりを告げ、天に昇って行くようにも見えた。

「あつ大蛇様や。大蛇様にちがいない。」「そうだわ。大蛇様が身を投げ出してわしらを助けて下さったんや。」「そうや、そうや。大蛇様のおかげや。」「ありがたいことや。」と、口々に感謝の気持ちを話合った。

小山の動きが止まる様子を息をこらして見ていた川上の人たちは、助かったことを心から喜び合った。しかし、上の畑の洞穴にすんでいるという大蛇を見た人はいなかった。

今でも川上から広岡へ越す街道の両側に、二つの小山が見られ、この山の頂上には「へんび神様」が祀られ、蛇の頭と言われる小山がある中津川上の集落はモチ穴と呼ばれている。

文・中田 良三

絵・高橋 錦子

やれ飛べ観音



むかし、むかしの話だ。

ある日、商家の主人が、東円寺を尋ねて住職さんに相談をもちかけていた。

「お恥しい話だが、倅が遊びに出まして、帰ってこんのですよ。あちこち手わけして探してみたんだが、どうしても見つかりません。これは、ひよっとしたら、もう死んででもいるのではないかと、胸がさわぎまして、思いあまつてご相談にきました。何かよい考えはないものでしょうか。」

と、言うのである。静かに聞いていた住職さんは、

「一本気なお宅の息子さんのことだ。思いつめたあげくと言うこともあるが。」
と言いかけて、しばらく考えていたが、近くにあった木の札を取りよせて、お経の文句をすらすらと書いた。

「もし、死んでおれば木曾川だな。このお札を川に流してみなさい。もしこの



札が沈んだら、そこを探してみたらよいでしょう。」
と、言ったそうだ。

早速、木曾川に流してみた。流れる木の札を追ってゆくと、玉蔵橋の近くに、けわしく切り立った崖があり、その下に大きく渦を巻いている、青い淵があった。淵まで流れてきた木の札が、一瞬とまったかと思うと、くるくるまいはじめた。(あれよあれよ)と見ているうちに、木の札は沈んでいった。(さては)と思つて、淵の底を探してみると、息子が沈んでいたそうだ。

この淵の崖の上には、大きな松の木が枝を茂らせており、その根元には、石の観音様が、雨ざらしになって、川に向つて立つておられた。見るからにさびしそうで、息子の死に場所を、この観音さまが、教えたかと思われるほどだった。

こんなことがあつてから、この観音さまのところから、淵へ身を投げて自殺する者が多くなつたそうだ。

それから、また幾年かたつたある日、この淵にとびこんだ一人の若者が、設楽の森の川岸に打ちあげられた。生きかえつた若者が、ふとつぶやくように、

「不思議な気持ちだ。思い悩んで観音さまの側までくると、観音さまに、やれ飛べ、それ飛べとけしかけられて、つい飛びこんでしまった。」
と、言うのである。それから誰からともなく、

「あの観音さまの側へゆくと、やれ飛べそれ飛べと、観音さまがけしかけて、淵へとびこませるそうだ。」

「そうに違いあるまい。それであそこで自殺するものが多いんだ。」
「観音さまが、迷っている者をみんな自殺に、追いやるそうだ。」
などと言い出して、うわさはだんだん広がつていった。

そのころ、また(むかし、きびしい取りしまりにあつた隠切支丹が、聖母マリア像を、観音さまといつわつて、こつそり一緒にして祭つた。それで観音さまが崇つて『やれ飛べそれ飛べ』とけしかけては、人を死に追いやるそうだ。)と、いかにも知つているようなことを、言い出す者もあつて、うわさは宿場中に広がつた。それから誰言うともなく、この観音さまを、やれ飛べ観音と呼ぶようになつた。

宿場の心ある人たちは、(これは観音さまを、切支丹のマリア像と一緒にし

たり、雨ざらしのまま、誰も祭らないからだ。」というので、お堂を建て、また、観音さまの向きも、川を背にし恵那山に向けて祭りなおした。そして、ここで死んだ人たちの霊をなくさめて、お祭りもした。それからというもの、ここで自殺する者は、なくなつたということだ。

今でも、北野の木曾川の岸に、小さな祠があり、近所の人たちは、長寿観音菩薩と呼んで、毎年春にはお祭りをしているということだ。

文・花田 玲子

絵・藤原 梵

かくめいせき

覚明石



むかしむかし、覚明という行者がいた。木曾の御岳山をはじめて開いたといえらい行者だ。

覚明行者は、今から二百六十年も前というから、江戸時代の中ごろ、尾張の国に生まれたそう。子どもころには、いろいろのことがあって、たいそう苦労をしたそうだが、ある時、一大決心をして、修業のために、ただ一人で、四国八十八ヶ所をお参りする旅に出た。

覚明行者が、土佐の国の足摺山中にさしかかったときのことである。もう日はとっぷりとくれていた。急な山道を登っているとき、今まで肌身はなさず持ち歩いてきた大切な鉦鼓が、どうしたことが二つに割れてしまった。

「どうして鉦鼓が割れたろう。」
と不思議に思いながら、近くの大きな木の根元に腰を下して考えていたが、旅

の疲れか、そのうちに眠ってしまった。すると、白い衣を着た人があらわれて、「お前に鉦鼓をさすけよう。この山中を探せ。」という。

「あなたはどなたか。」
とたずねると、

「私はこれより東方、御岳山に住む白河権現だ。今日からお前に覚明の二字をあたえる。お前は今からふるさとへ帰って、信濃の靈山を開くがよい。」
と言った。

夢からさめた覚明行者は「これは神のお告げに違いない。」とまだ夜も明けきらないのに、山中を探し歩いた。すると、光り輝く石が見つかった。石を取ろうとすると、持っていた数珠が石の上にはずり落ちて、チリンというよい音をたてた。石を取ってたたいてみると、前の鉦鼓と少しも変わらないよい音がした。「これこそ神仏の加護に違いない。」
と、覚明行者は、それから一生涯この石を鉦鼓として持ち歩いたということだ。



今、中津川にある覚明石というのは、この石であるということだ。

白河権現のお告げをうけた覚明行者は、尾張の国に帰って来た。そのとき、ふるさとの五条川は、はらんして川水があふれていた。覚明行者は、持っていた金剛杖を流れの上に浮べ、その上を一本歯の下駄で、さっさと向こう岸へ渡っていった。これを見た村の人たちは「これが神通力というものか。」と目を見はったそうだ。

それから、覚明行者は、靈山を開くために木曾へゆく途中、ここ中津川の子野の槓坂の茶屋で一休みした。覚明行者は休みながら、茶屋の主人古根佐次兵衛に、御岳山の参道を開く決意を話した。佐次兵衛も心打たれて、

「それは、大事業でございます。私もできることは力添えしましょう。」
と言つて、覚明行者の宿を引きうけたそうだ。

それから何年かかかつて、苦心に苦心を重ねた末、覚明行者は、御岳山の参道を開いた。その間に、尾張と木曾を何回かゆききしたが、そのたびに、ここ槓坂の古根佐次兵衛の茶屋に泊り、佐次兵衛に勇気づけられたということである。

覚明行者が、最後に木曾の御岳へ向う時のことである。いつものように、槓坂の茶屋に泊った。主人古根佐次兵衛に、

「長い間、お世話になりました。お礼の印に、私が諸国の修業行脚に用いた鉦鼓の覚明石と、湯呑と、数珠を置いてゆきます。もし何かのときには、これを祭つて信心してください。私は御岳の神となつてお守りしましょう。」
と言い、

「叩かれて人の募る鉦鼓石、覚明石と人に知らせん。」
の一首を残して、旅たったということだ。

今、この覚明石は、チンチン石とも言つて、東円寺近くの朝日山の覚名様にあり、覚明行者の数珠、湯呑、金剛杖とともに御神体として大切に祭られているということである。

文・花田 玲子

絵・加藤 公雄

阿寺白米城

むかしむかし、四百年程前、手賀野に阿寺城という城があった。後ろにはけわしい山をひかえ、前は中津川を見下ろす絶壁で、自然を配した要害の地であった。この城は、岩村城主加藤景康が東山道を押えるための要害として築いたもので、遠山友重が守っていた。

この頃、武田信玄の子ども勝頼は、信玄の死後、勢いの衰えた武田勢を盛り返すために五ヶ国の軍勢を二手に分けて織田勢である美濃の国へ攻め入った。

武田勝頼の家来である木曾義昌の本隊は、木曾福島から伊那路をぬけ上村に入り織田方に味方していた串原、明智、飯羽の城を攻めた。他の一隊は、木曾から攻め入り霧ヶ原城、落合城、中津川督ノ城を攻め落とし阿寺城へ向った。その知らせを受けた阿寺城の城主、遠山友重は城下の百姓たちに言いつけ籠城のための米や野菜を集めて敵を迎え打つ準備をした。

木曾義昌は中津川をはさんで前山の麓の小高いところに本陣を構えた。阿寺城への道はけわしく、なかなか攻め入る手だてがない。食糧攻めか、水攻めにするか、敵の武將たちは頭を寄せて協議した。

「食糧は大分ため込んでいるようす、今は水攻めより手がない。阿寺城への用水路を切り落すことだ。」

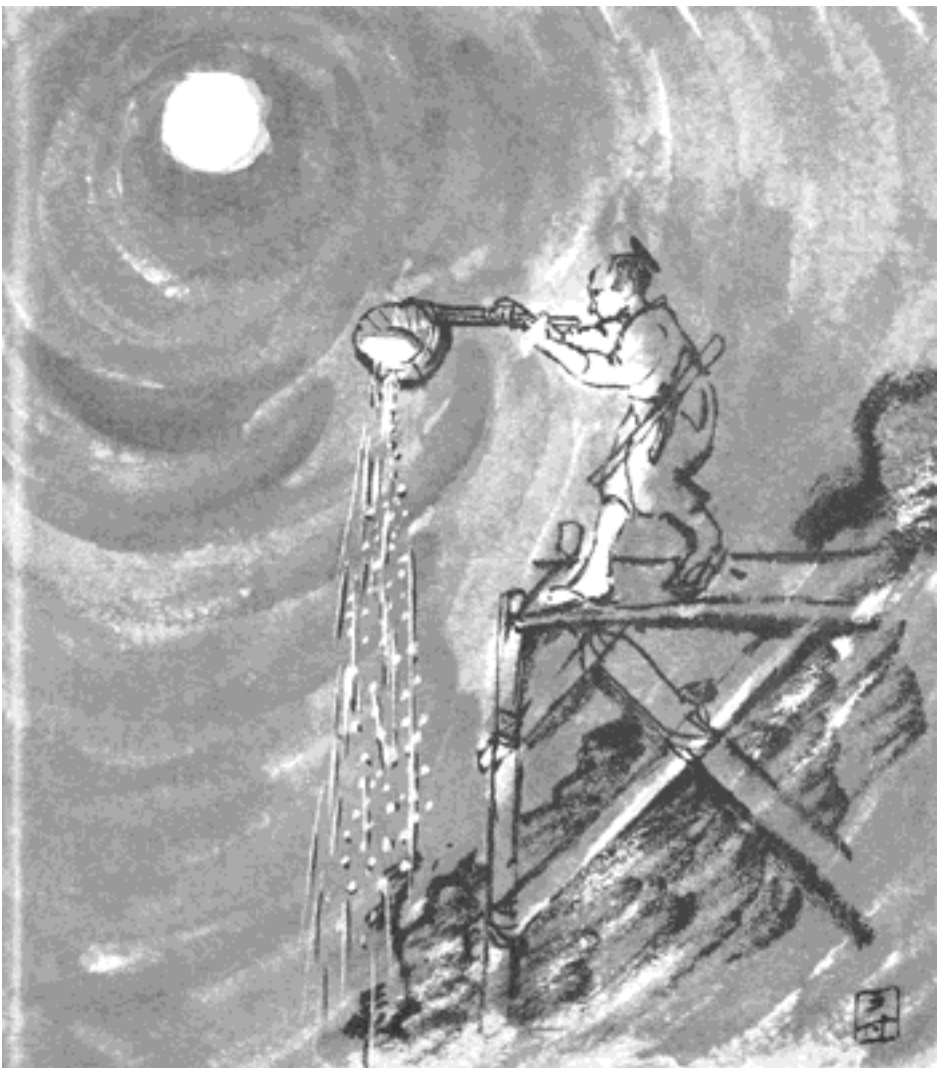
杣人たちが集められ阿寺城の西の山へ登った。城の用水路は、杣人たちの斧で次から次へとたち切られていった。この辺りを斧戸というのはこのためである。こうして水路をたち切られた阿寺城では、貯えた水も残り少なくなり家来たちの間にも心配の色が広がって行き、次第に戦う気力を失って行った。

「誰かよい知恵はないか。」

友重は家来全員に水攻めから抜け出す方法を考えさせた。その時、一人の侍がすゝみ出て、

「今、残っているのは米だけです。この米を使って水に見せかけ、敵をあざむく、というのはどうでしょうか。」

と言った。どうするすべもなくなった今では何でもよい、やれることはやって



みょうということになった。

米倉から白米が運び出された。侍は月の出るのを待ってやぐらに上った。

「やあやあものどもよく聞け、われらが城にはまだまだ水があるぞ、見るがよい。」

と大音じょうを上げて、大きなひしゃくですくった白米を、水を流すようにサラサラと高い城の石垣から流し落した。白米は月の光に照らされて、敵の目はまるで水が落ちるように見えた。もう城内には水はなくなる頃だとたかをくくっていた敵方は、

「りやりやあ、あの水を見よ、もうないと思った水が惜しげもなく流されている、いったいどうしたことだ。」

と騒ぎ出した。いつ落ちるか、もう明日にも降参するのではないかと待ちに待っていた敵方は、気がゆるんであっけにとられていた。この時である。

「わあ、わあ、わあ。」

阿寺城の城兵たちがいつきに敵陣へ打って出た。敵はあわてふためき、さんざんな目に合って逃げて行った。

白米を流して、水攻めからのがれたこの城のことを、それ以来「白米城」と呼ぶようになった。

しかし、阿寺城は再び攻められて落城したのである。その戦いのはげしさは今に残る黒血ケ洞、箭竹という地名にもうかがい知ることができる。

文・加藤 千満子
絵・大橋 寿美代

三匹のきつね



むかしむかし、美濃の国中津川の宿に三匹のきつねがおった。その一匹は、駒場の宿はずれ小出ノ木のもとに住み、小出ノ木小次郎といった。もう一匹は、本陣の近くにある西生寺の大きな銀杏の木もとの洞穴に住む銀杏のお夏。そしてもう一匹は、前山の麓の方導寺の榎の木のもとに住みついた方導寺鈍二兵衛である。

この三匹のきつね、どれも負けずおとらずの化け上手の上に大そういたずら好きでもあった。

小出ノ木小次郎と銀杏のお夏は、いつも中津川の川原で落ち合っては、道行く人を化かして人々を困らせた。しかし、小出ノ木小次郎のお小姓姿は、若い娘も、百姓家のおかみさんも、人目でぼーっとなってしまうほどの艶姿であった。銀杏のお夏の腰元風の娘も、色白くうりざね顔のほんに品のよい姿で、仕

事帰りに屋台で一杯きゅっとひっかけたほろよいかげんの男たちは簡単にひっかかっってしまった、化かされて気が付いた時などは、わが身のあわれさに次の日は仕事にも出かけず寝込んでしまうほどであった。方導寺の鈍二兵衛は、これまた八尺もあるう大入道に化け、こん棒をかざしてあばれまわり中村や実戸の人々を困らせた。

村人たちは、あまりのきつねたちのいたずらにたまりかね、一つこらしめてやるうではないか、ということでもみんなが集って相談をした。

小出ノ木小次郎を中津川の川原に呼び出し、

「どうじゃ、お前と化けくらべをしようではないか。」

小次郎は、これはおもしろいとばかり、

「おうおう、いくらでも相手になってやる。」
という。

「それじゃあ、もしお前が負けたら小出ノ木を出て行け。おれが負けたらお前の大好物の油揚げを毎日やるわい。」

ということ、中津川をはさんで人間ときつねの化し合いとなった。



「一つ、若衆！」

審判の声が川を渡って行った。

「なんじゃ、こんなやさしいもん、人間どもはやっぱりたわけじゃわい。」

「一つ、腰元！」

「なんじゃ、なんじゃ、お夏とおなじじゃないか。」

「一つ、大入道！」

「なんじゃこんなもん、体ばっかし大きい、あのばかったれの鈍二兵衛と同じにされてたまるか。もっとおもしろいものは出んのか。」

小次郎はぼやきぼやき化けた。

「一つ、おかめ！」

「一つ、ひよつとこ！」

「あれっ？ええつと、ひよつとこ、つて、どんなつらしてたかなあ。」

見れば対岸ではもう人間がひよつとこに化けている。

「あれあれっ？人間はうまく化けるし、早いんだなあ。」

小次郎はだんだんあわて出した。あわてればあわてるほどうまく化けられな

い。

「なにやつとるー、早く化けんか！」

審判が大声でどなる。

「一つ、鬼！」

「りやりやりりや、おに？おらあ鬼なんて見たことない。」

「さあ、降参したか。」

すると小次郎は、さっと身をかわし、

「化かし合いは、だまし合いだ。」

と、身も軽々とあちらへとび、こちらへとんで、とてもつかまらない。

逃げまわっているものの小次郎は、どうして人間があんなに化けるのがうまいのか不思議でならない。

「お前たちは、どうしてそんなに化けるのがうまいのだ。」

「知りたいか。」

「うん。」

「教えてやるうか。」

小次郎はとがった口元を振ってうなずいた。

「よし、その秘密は、この袋の中に入っておる。」

「その袋？」

大きな木綿袋の中に何か入っている。

「見てもいいか。」

「どうぞ、どうぞ。」

小次郎はおそろおそろ村人のひろげている大袋のそばへ寄って来て中をのぞき込んだ。その時である、村人の一人がのぞき込む小次郎の尻を持ち上げ袋の中へねじ込んでしまった。小次郎は不意をつかれ、袋の中であばれるのあばれるの。

「どうじゃ、まいったか。」

「まいった、まいった。」

「もう悪いことはしないか。」

「もう人を化かしたりしません。」

「小出ノ木を出て行くか。」

「はい、すぐ出て行きます。」

小出ノ木を出て行くことになった小次郎が、ぼろぼろ涙を流すのを見て、村人たちは饑にきつねの好物の油揚げの入ったうどんを食べさせてやろうとした。が、小次郎はなかなか食べようとしない。

「どうしたのだ、きらいなのか。」

みんながかわるがわる小次郎の顔をのぞき込むと、

「もう、めん類はこりこり。」

といって逃げて行ってしまった。人間が化けたと見せかけたのは、お面をとるかえたのである。

小出ノ木を追われた小次郎と、銀杏のお夏と、方導寺の鈍二兵衛の三匹、いとはなく西生寺の庭に集まるようになった。毎晩のように歌ったり踊ったりでそれはもうひどいものであった。庭に散った銀杏を大きなしっぽで散らしたり、大事な松の木に爪あとをつけたりするので朝になるとまるで嵐の後ほどお寺の庭は荒されてしまうのである。その噂が宿場中に広がって行った。信心



深い年寄たちはおこって、それから油揚げのお供もなくなってしまった。

三匹のきつね、ぷりぷりおこって、どうにかして人間どもに一泡ふかしてやらねば気がおさまらない。

「中津川の宿に疫病をはやらせて、やつらを苦しめてやろう。」

ということになった。その夜から三匹は、西生寺の銀杏の木のまわりを狂ったように歌い踊りつづけた。

前山見れば 真暗じゃ

中津川の水に えやみを流しや

あつという間に 死人も出よう

大そうどうの コンコンチキ

こんちきしょうの サイサイジヨ

それから一週間もしないのに中仙道筋の町並から奇怪な熱病がはやり出した。その熱病にかかった人は大変な苦しきみようで、熱にうなされながら四つんばいになってはいずれまわった。

「これは何かの祟りにちがいない、病気の神様、裸武兵を連れて来い。」

ということとで駒場の津島神社の絵馬堂に大の字になって寝ていた裸武兵を頼んで来て病人の家をまわってもらった。裸武兵が男の病人と一つ寢床に入り、女の病人とは一つ茶わんの水を分け合って飲むとたちまち病気は直ってしまった。人びとはそのご利益に大よろこび。一方、三匹のきつねは西芳寺の大銀杏の洞穴で、

「裸武兵はこわいよ、こわいよ。」

と、小さくなって震えていた。

それからというもの、小出ノ木小次郎の小姓姿も、美しい銀杏のお夏の娘姿も、方導寺鈍二兵衛の大人道も見なくなった、ということだ。

文・加藤 千満子

絵・加藤 公雄

うしろむき薬師



むかしむかし、今から千年以上もむかしのことだ。最澄というえらい坊さんがいて、唐の国へ渡り佛教を学んで帰った。そして、京都の比叡山に登り天台宗という教えを開き、その教えを広めるために諸国をあちこちとまわって歩いた。

この最澄が、東山道を通って東国へ行かれる時のことである。この辺りは道も険しく、あまり人が通らないために草はおおい茂って道をふさぎ、大雨のために道は川原のように石ころがごろごろしていた。旅人たちは、食べるものを背負ってこの山道を通ったのだが、雨に逢っても雨宿りする所もなく、時には病にかゝったり、飢えたりして死ぬ人もあった。

最澄は、中津川から落合を通り神坂峠を越えようとされた。山を越え谷を渡って峠の険しい道にさしかかった。中津川から信濃の国の園原までの道のり

は遠く、途中には休むところも泊るところもない。夜になると狼におそわれたり、きつねやたぬきに出逢ったり、熊が出たり、それはそれは大変な難所であった。

最澄は、なんとかして旅人を救わなければならぬと考え、神坂峠の高いところに立って、山や谷を見まわした。そして、この峠に、旅人の休泊所を建よつと考へた。最澄は峠をくだり、あちらこちらの部落をまわつて、休泊所を建てることを話した。最初のうちは、少しも話しを聞いてくれなかつた村人たちも、最澄の熱心な教えに心を動かし、何とか協力してくれることになつた。長い長い月日がかかつた。とうとう、峠の西側と東側に広済院（今の霧ヶ原）と広拯院がたつた。

最澄は、旅人が無事旅が出来るようにと、自分で一米ほどの木の薬師如来像を彫り路傍に祭つた。この薬師如来像は右手を上げ左手に薬壺をのせている。

その後、この薬師如来像について面白いはなしが伝わっている。

ある日、馬に乗つた武士がこのお薬師さまのお堂の近くまでくると、どうし



たものか馬が前に進まない。

「どう、どう、どうしたのだ。」

しかし、馬は足ぶみをしていてどうしても進もうとしない。

「どう！どう、どう！」

武士は腹を立て馬の尻にむちをあてた。

「ひひーん。」

馬は前足を高く上げていなくなると、たて髪をさか立てて走り出した。武士はどんでんがえって馬の背から振り落された。ところが、不思議なことに馬に乗ってお薬師さまの前を通る人は、みんな馬から落ちてしまうのである。村人たちは、

「お薬師さまの前を馬に乗って通れないのは、なにかの祟りにちがいない、靈験あらたかなお薬師さまだから、村にまでなにか祟りがあると大変だ。」

と心配した。

「お薬師さまの前を通るのはやめようではないか。」

ということになり、お薬師さまをうしろ向きに安置した。それからというもの

は、馬に乗って通つても落馬することにはなくなった。こんなことがあったので、村人たちは、いつの間にかこのお薬師さまのことを

「うしろ向き薬師。」

と呼ぶようになった。

今、この薬師如来像は、東円寺のご本尊として国宝に指定され、裏山の立派な奉安堂に祭られている。年一回開帳される。最澄は後の伝教大師である。

文・加藤 千満子

絵・藤原 梵

踊る人形



恵那山のふもと、川上には、元禄以来何百年と続いた恵那文楽がある。三味線にあわせて人形浄瑠璃が語られ、浄瑠璃にあわせて人形使いが人形をあやつるのが文楽である。川上に保存されている人形の首五十体のうち、二十三体は民俗資料として岐阜県の文化財に指定されている。首は、大阪文楽座所蔵の人形について、全国的にもけっさくだと評価されている。長年保存しているうち、首のあちこちが欠けたり、削れたりしているが、下手な修理はかえって人形の品位を汚すものとして、手は加えられていない。それがかえって、何百年も続いてきた文化の香りをたゞよわせている。

恵那文楽は、元禄の頃から、一日の労働が終わったあと、練習仲間の家をかわりばんこにまわっては、土間にむしろをしき、たいまつをたいて、そのあかりで練習を重ねてきたといわれている。この伝統ある恵那文楽が、明治の一時期、



国からのおふれで上演をとめられた。これはその時の話である。

原さんは、庭のあじさいの花を見ていた。今年のアジサイは、ことのほか色があざやかであった。しばらく見とれてみると、誰もいないはずの家の中で、スルー、スルーと廊下をすり足で歩くような音がした。原さんは不思議に思つて、ふすまをあけてみた。

廊下には誰の姿も見あたらなかつた。次の部屋のふすまを、あけてみた。部屋には、大きな長持がおいてあつた。原さんは、その長持を見て「おっ」と思わず声をあげた。たしかにふたをしめておいたはずの長持から、いくつもの白い顔が、原さんを見上げていた。中にはじつと、にらみつけているのもある。

この白い顔は、元禄時代からこの川上で演じられてきた、恵那文楽の首であつた。ベベン、ベベンと三味線がなつて、三味線にあわせて人形をあやつる文楽の人形であつた。原さんは、その文楽人形つかいであつた。

明治になつて、国は「芸人にあらざるものは、祭礼といえども、興行すべからざること。」というおふれを出し、芸人には鑑札を持たせた。川上の人達は、鑑札がもらえなかつたために、文楽を演ずることができなくなつた。それ

で、少しずつ首をわけてしまつておくことにしたのだつた。

原さんは、長持の中から首を一つ出してみた。なきじょうごといわれる、人形であつた。どことなくひょうきんな顔をしているが、原さんの顔を見上げて、今にも泣き出しそうであつた。

「おう、おう、お前も芝居がしたかろうに、そんなに泣くのを、こらえておるかよ。」

原さんが話しかけていると、そこへ奥さんが帰つてきた。

「ちよつと、わしの話を聞いてくりよ。」

原さんが、さっきの不思議な話をすると、奥さんは、

「そりゃ、人形にも生命があるといひますでなも。長いこと、長持の中にしまいおかれた首が、世の中に出とつて、家の中をさまよつておるのにちがいないですわ。」

「なあるほどなあ。人形にも生命があるんかのう。」

原さんは、奥さんの言葉にえらく感心した。

ある日、原さんが寿座という芝居小屋のそばを通りかかると、中からなにや

ら人の声がする。

「さて、今日はなんの演じものもないはずだが。」

原さんがおどろいて近づき、中をのぞいてみると、チョンチョンと拍子木の音がして、うすぼんやりしたローソクのあかりの中で、なんとあのなきじょうごが、口上をのべているところであった。

「さてさて、本日、皆様方にここに集まっていたのは、長い間、芝居もできず、うす暗い長持の中にしまいおかれてばかりで、いかにもなさけない。せめて年に一度でいいから、芝居がしたいと思ってご相談申し上げようと、こう思いました……。」

ます席の中でも、いくつもの首が、うなずいたり、ゆらゆら頭をふったりしながら舞台を見上げていた。よく見ると、原さんの家の首ばかりではない。川上中の首がより集っているのであった。

「ほんとに、そのとうりだよ。」

すんだ声が出たかと思うと、長い髪を一つに束ねて白い着物をきた女の首が舞台にとびあがった。



「あたしやね、芝居ができないのが悲しくて、とうとうこの目を泣きつぶしてしまつたよ。」

見えない目を見開いていう首は、ねむりであつた。

「そつだ、そつだ。」

「おらあも芝居がしたいよう。」

「芝居がしたいねえ。」

「芝居がしたいよう。」

「かびくさい長持の中は、ごめんだよう。」

いくつもの首が口々にいうと、あかりがゆらあ、ゆらあゆれて、そしてふつと消えてしまつた。と同時に、さつきまでいたいくつかの首も、ふつとかき消すように姿が見えなくなつた。原さんは、しばらくぼんやり立ちつくしてゐた。まるで夢を見ているような気分であつた。

次の日、さつそく原さんは、川上の人達に昨夜の話をした。すると、

「おらの家の人形も、夜中に踊つておるぞ。」

「おらんとこのも、そつだ。」

「こんな人形が世の中に出たがつておりや、いつくらおかみのおふれだとしてなんとかしてやらなるまい。」

「こんな山の中だもの、おかみの目もとどくまい。こつそり文楽をやるうじやないか。」

みんなの意見が一つになつて、久しぶりに文楽を上演することになつた。その夜、寿座は、川上中の人が集つて、「関取千両のぼり」がみごとに演じられた。人形が、生き生き芝居をしたことは、いうまでもない。

こうしてこつそり、続けられた文楽も、やがておかみの禁止もとかれ、恵那神社の祭礼など、おまつりなんぞに演じられている。

文・三戸 律子

絵・高橋 錦子

どじべえぎつね



中津の町にや、そりや数知れぬきつねが住んでおった、ということじゃ。そのきつねども総とりしまり、きつね組の組長ともいうべききつねの名を、どじべえと叫びたげな。

そもそも、そのどじべえという名の元祖は、中村の保どう寺に住みつく、たぬきの名だったという。そのたぬきのはなしも、したいところじゃが、きょうは、その名をゆずり受けた、どじべえぎつねのはなしだけすることにしよう。

河原に近い八幡町の水神様に、まっことちよっとした芝居小屋の舞台があったな。芝居小屋といっても、舞台だけのもので、ま、野外舞台やったな。

そこでは、町の人々が寄り合いをしたり、祭り時にや、ちよっとした芝居をやったり、浄瑠璃語りに文楽人形をあやつりしたり、みんなのごらくの場

じゃったな。

ある夏の日、川上の源さんが、町に用事があった、明るいうちに川上を下り一ぱい酒をのんで、ごきげんで帰る時や。とつぷり日がくれて、その日も明日に変わるうとするころ、川上街道の登り口である、八幡町を歩き始めたあたりでやみをついた目の前が、ぱっと明るうなった。まるで、今まで歩いて来た町を見たようじゃった。

源さは、びっくりぎょうてん、よっぱらった目をこすり、
「りや、りや、うーんだいぶんよっぱらったわい。おりやまた、町へ向って
おったかいの。」

そういつて、ひよつくり向きを変えて、今来た道を歩みかけると、なんと浄瑠璃を語る声と、けたるいしゃみせんの音がするではないか。

(こりや、また、水神様の舞台じゃ。まんだ、人寄せをせておったか)と思う
が早いか、源さの足は、すたすたと水神様の舞台に向ってあった。

おるわ、おるわ、大ぜいの客が、浄瑠璃のかなでる音と語りに乗って舞う文楽の人形をじっとくいいるように見入り、笑ったり、泣いたり、手をたたいた

りしておった。

源さもその中にまじって、いつしよに見入った。

そばに座っている客がすすめるごちそうや、まんじゅうを口に運んでは、かなしくもゆかいげな浄瑠りをきいておった。

やがて、夏の東の空がしらみかけて来たとき、夜明けを待つように、野良仕事に出かけた百姓衆が、水神様のまわりの田んぼにあらわれた。

すると、客は一人へり二人へり、宙を返るようにして去って行き、あつというまに、浄瑠り語りも人形もあやつり人も、だあれもおらんようになった。

がらんとした舞台を、まだ、うつろな目をして、もそーと見入りおる源さは馬ぐその中に座っておったげな。

年に一度、きつね組合の寄り合いがあるときいたが、その日であったかの。

そこに集る代表は、東組 どじべえ、西組 こでの木こじよろう、南組 とりでの藤吉、北組 河原のお紅だ。